

第38回 全国環境研交流シンポジウム 未回答となった質問への回答

(2) 「川崎市における化学物質の環境リスク評価について」

発表者：川崎市環境総合研究所 江原 均 様

【質問】

先ほど（事務局補足：大気モデルによるばく露量推計）の質問に関連して、HP上で公表する上、特定の事業者が特定されないようにマップでの地域の分け方を大まかにするなど工夫されているのでしょうか？

【回答】

川崎市の環境リスク評価書等では、臨海部、内陸部、丘陵部としての結果のみ記載しております。

しかし、使用している個別のPRTRデータについては、環境省のホームページなどで検索が可能です。

(5) 「沖縄県のサンゴ礁生態系と赤土等の関係について」

発表者：沖縄県衛生環境研究所 比嘉 彩也香 様

【質問】

赤土等の負荷によって赤土等への耐性が高い種はどのように繁殖するのでしょうか。

【回答】

赤土等への耐性が高いサンゴ種というのは、「赤土等の負荷量が小さい地点、大きい地点どちらでも生き残ることができる種で、結果的に負荷量の大きい地点で確認できる種」という認識をしています。また、「赤土等の負荷量が大きい地点でも加入できる種が、赤土等への耐性が高い種」である可能性も考えられます。今回の発表で紹介したサンゴ幼生着底試験は、比較的赤土等への耐性が低い種(ウスエダミドリイシ)での検証結果であり、赤土等への耐性が高い種での検証はしていません。そのため、赤土等への耐性が高い種がどのように繁殖しているのか、現時点でお答えすることはできません。

赤土等への耐性が異なる種でサンゴ幼生着底試験を比較できれば、耐性の違いにおける繁殖(有性生殖)の違いが分かるかもしれませんが、それらの種(非ミドリイシ類)の幼生を実験用に確保するための技術は十分には確立できておらず、検証は困難な段階にあります。

(8)「福島県浜通りにおける河川中の放射セシウム動き」

発表者：福島県環境創造センター 竹内 幸生 様

【質問】

河川水中懸濁態と溶存態Csが沿岸海洋に流れ込んだ後、挙動はどう変わるのでしょうか。

【回答】

河川水中の溶存態Csが沿岸海洋に流れ込んだ後の挙動については不明ですが、

懸濁態Csについては、その数%が沿岸海洋にて溶脱するとの報告があります。

詳細は以下の論文をご覧ください。

Niida et al., Science of the Total Environment, 821 (2022) 153408

以上となります。

(4)「愛媛県における暑熱環境の調査結果について」

発表者：愛媛県気候変動適応センター 横溝 秀明 様

＜情報共有のため公表の必要無し＞

環境省の測定方法は、自然湿球温度ではなく、単なる湿球温度を基準にしている、環境省が系統的に低く出るはずで

環境省のオリンピック・パラリンピック暑熱環境測定事業でその辺調査したデータがでています。

携帯型機器と通常測器の差は：（下記ファイルのp29、報告書全体ではp115～）

<https://www.env.go.jp/content/900404776.pdf>

向井センター長指摘の自然湿球温度と環境省の測定方法との差は：

<https://www.env.go.jp/content/900404755.pdf>

(7)「隠岐の40年間の大気粉塵試料を使った気候変動影響調査」

発表者：国立環境研究所 向井 人史 様

＜情報共有のため公表の必要無し＞

ご参考までに：Increasing N Abundance in the Northwestern Pacific Ocean

Due to Atmospheric Nitrogen Deposition

Science 334, 505 (2011) DOI: 10.1126/science.1206583